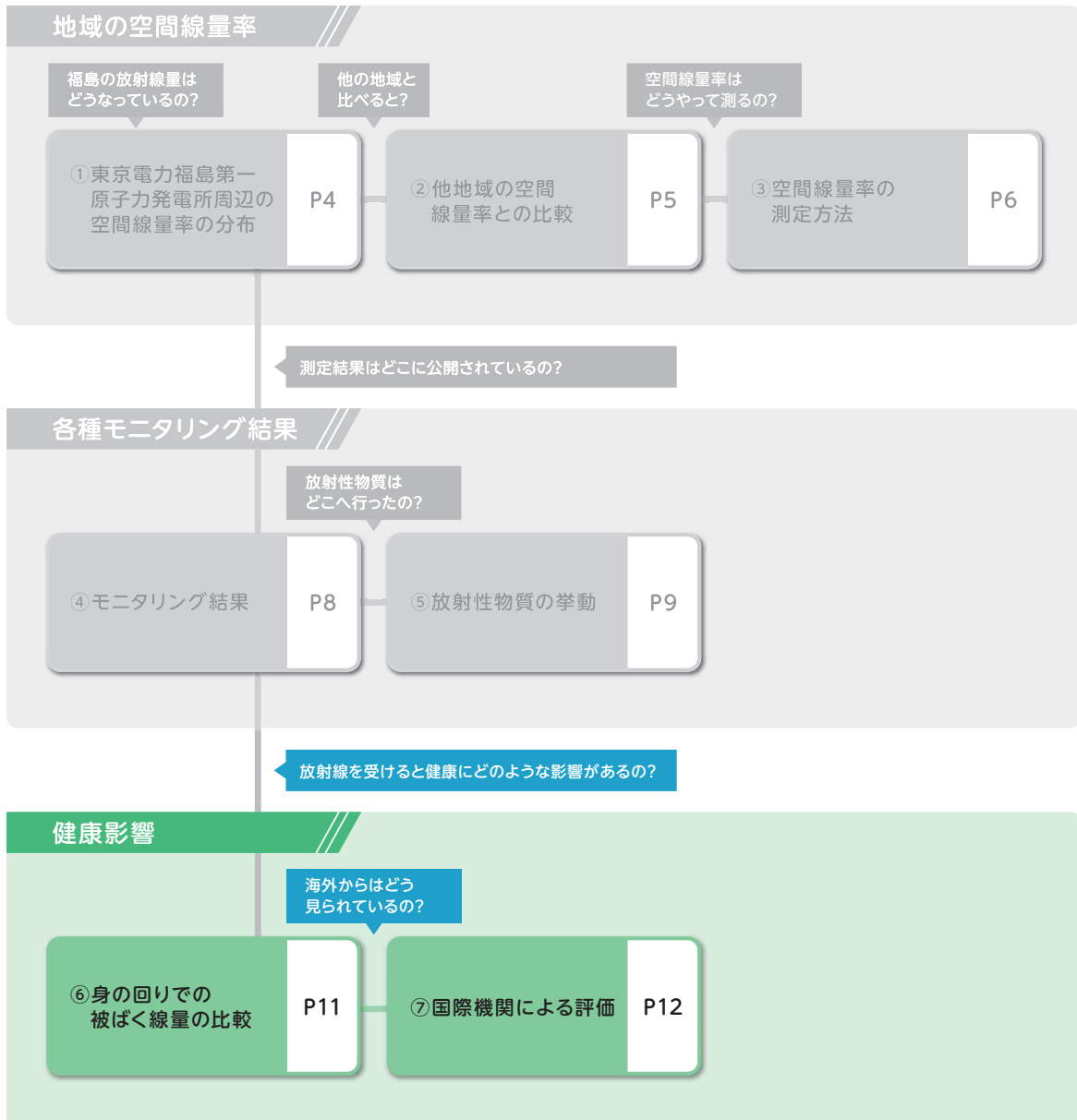




# テーマ 健康影響

日常生活を送る上で受けている、身の回りにある様々な放射線被ばくとその線量についてまとめています。また、放射線被ばくに関する国際機関による評価も紹介しています。

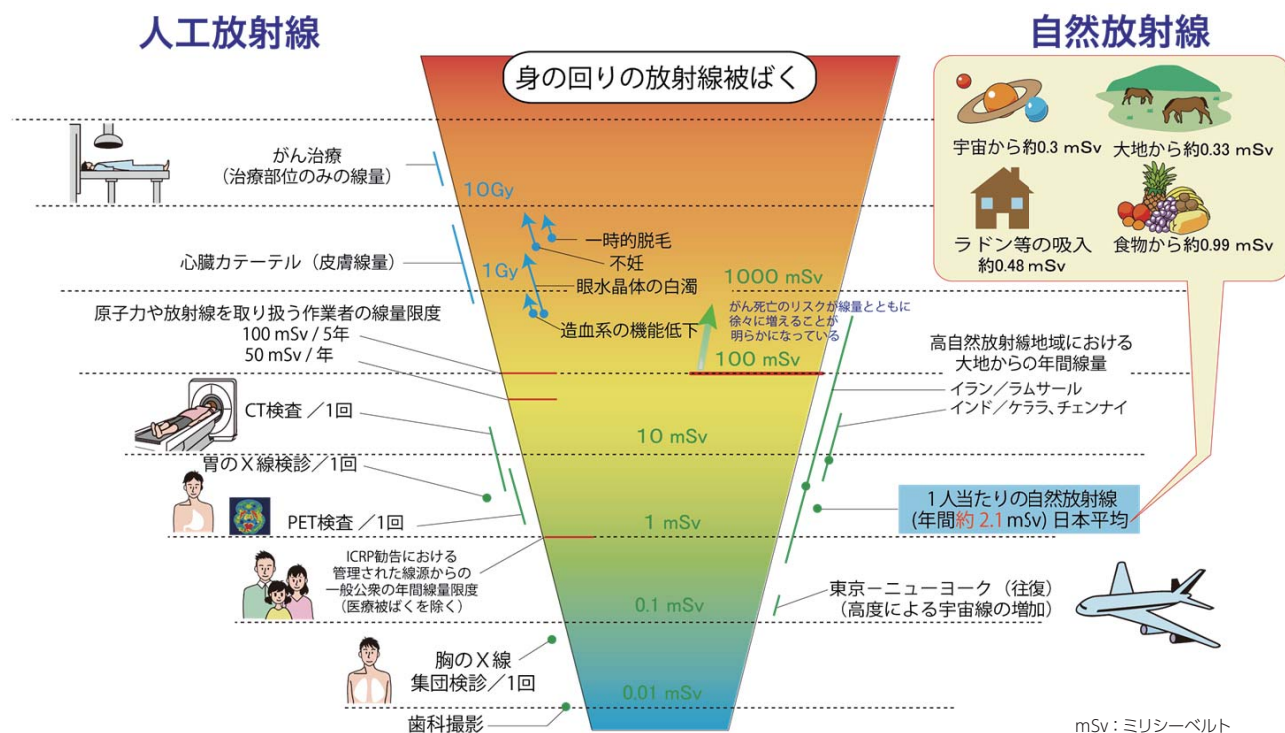




## ⑥身の回りでの被ばく線量の比較

身の回りでの放射線被ばくは、どの程度の被ばく線量なのでしょう。

### ●被ばく線量の比較(早見図)



出典:

・国連科学委員会 (UNSCEAR) 2008 年報告書  
 ・国際放射線防護委員会 (ICRP) 2007 年勧告  
 ・日本放射線技師会医療被ばくガイドライン  
 ・新版 生活環境放射線 (国民線量の算定)  
 等により、放射線医学総合研究所が作成 (2018 年5月)

被ばく線量の比較の詳細は令和4年度版 上巻 77ページを参照

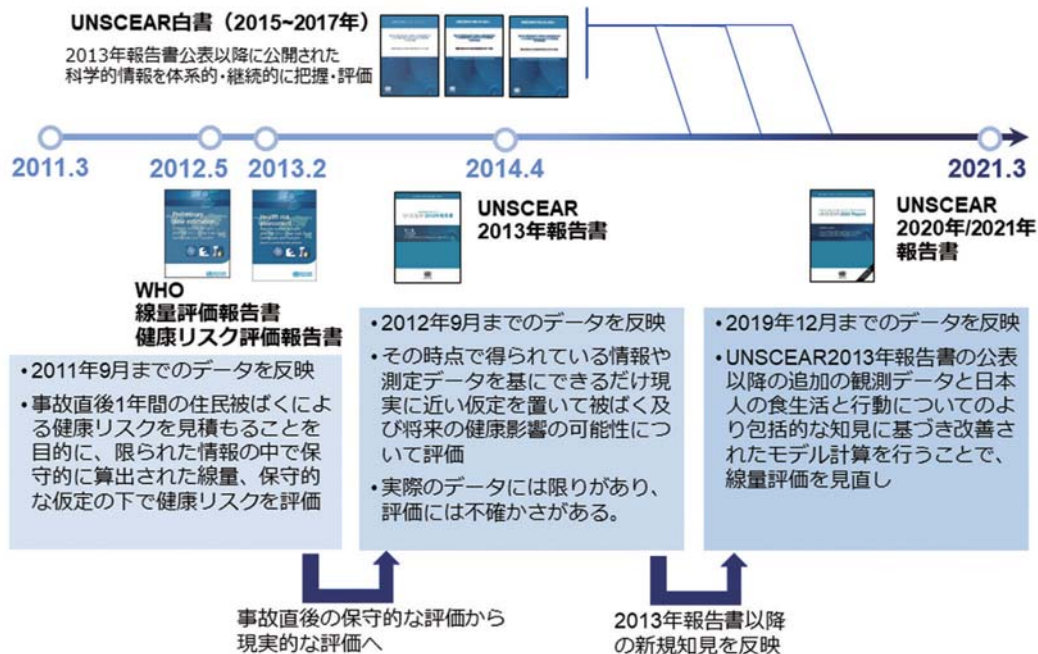
人への健康影響が確認されている被ばく線量は、100ミリシーベルト以上と考えられています。

調査結果の詳細は令和4年度版 上巻 117ページを参照



## ⑦ 国際機関による評価

事故後、世界保健機関（WHO）や国連科学委員会（UNSCEAR）が事故による被ばく線量評価やその健康への影響に関する報告書を公表しています。



国際機関は東京電力福島第一原子力発電所事故の影響をどのように評価しているのでしょうか。代表的な国際機関の主要な結論を見てみましょう。

	主な結論
WHO報告書	<ul style="list-style-type: none"> <li>被ばく線量が最も高かった地域においても、小児甲状腺がんを含む、がん・白血病のリスクの増加は小さく、自然のばらつきを超える発生は予想されない。</li> <li>結果として、放射線に関連する疾患の過剰発症を検出できるレベルではない。</li> </ul>
UNSCEAR 2013年報告書	<ul style="list-style-type: none"> <li>将来のがん統計において、事故による放射線被ばくに起因し得る有意な変化が見られるとは予測していない。</li> <li>最も高い被ばくを受けたと推定される小児の集団について、甲状腺がんのリスクが理論上増加する可能性がある。そのため、今後、状況を綿密に追跡・評価する必要がある。</li> </ul>
UNSCEAR 2020年/2021年報告書	<ul style="list-style-type: none"> <li>福島の住民に放射線被ばくによる健康影響は見られておらず、将来的にも見られる可能性は低い。</li> <li>原発事故後の福島で行われている甲状腺検査で見られる甲状腺がん発症率の増加については、高感度の超音波検診法の適用の結果と思われる。</li> </ul>

2012年及び2013年に公表された世界保健機関（WHO）の報告書や国連科学委員会（UNSCEAR）2013年報告書ではともに線量評価の基礎となるデータの不確かさに起因する、被ばく線量評価結果の不確かさがあることが述べられていましたが、UNSCEAR2020年/2021年報告書では、より広範囲な知見が利用可能となったために数多くの問題についてより不確かさの少ない結論が示されています。

国際機関の報告書の概要は令和4年度版 上巻 189、190 ページを参照